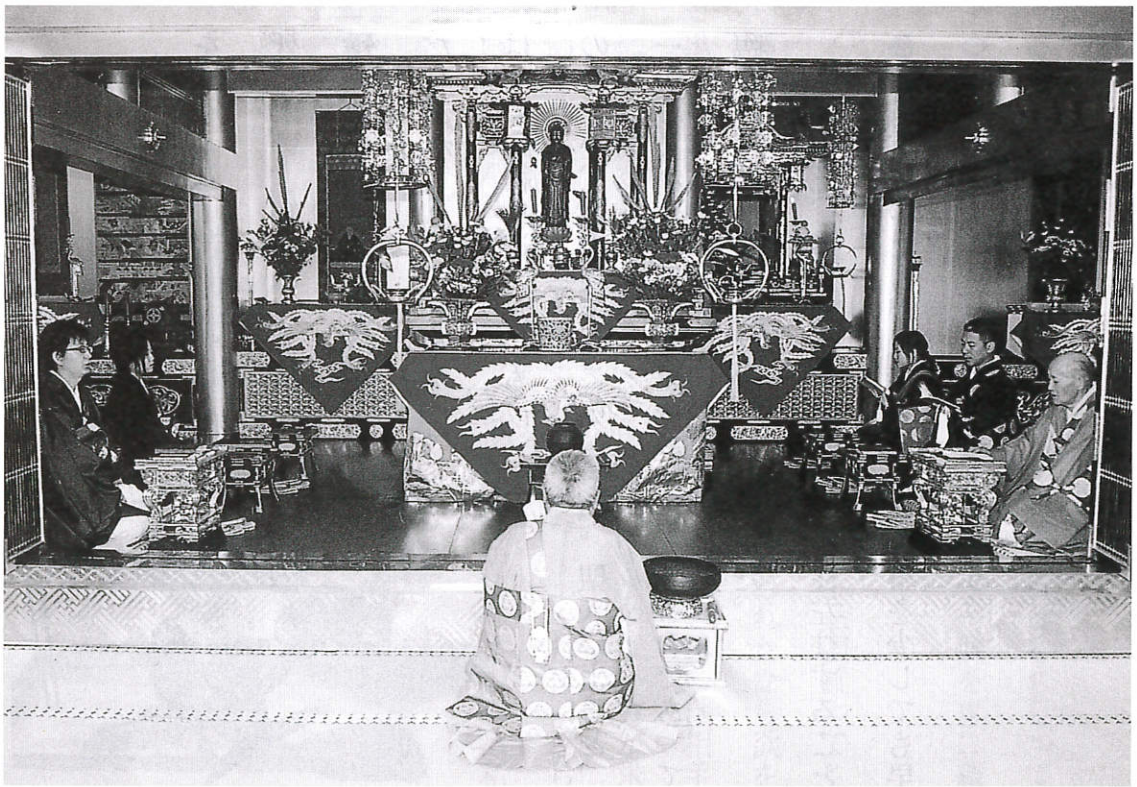
第 9 号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

師走ると称する年の暮れは、何かと多忙。だが、最近の年の暮れは大売り出しと海外旅行が定番になっていたが、平成二十年の暮れはいろいろな難問が山積みしている。一年の厄をはらい新しい心で新年を迎えるという除夜の鐘も今年はひびきがにぶい。世界不況をマスコミは伝えるが、不況下の人類の生き方を示す何モノをももっていない。先進国も後進国もすべてがお手上げで、末端の庶民の苦しみは深いものがある。

ともかくも あなたまかせの 年の暮れ

小林一茶が生きた時代と今の世とでは、その多様性は比べものにはならないが、いつの世も庶民はあわれである。こうした虐げられておる庶民の教えとして、庶民救済として親鸞・蓮如の念仏が生まれてきておる。御同朋御同行末端社会の雄たけびとして高揚される荘厳の世界が、全人類の理想であってほしいものだ。



報恩講

聖人のおことば

『ナニヨリモ、コゾコトシ。老少男女(ラウセフナムニヨ)、オホクノ人々(ヒトビトシ)死ニアヒテ候(サフラフ)ランコトコソアハレニ候(サフラ)へ。……善信(ゼンシン)ガ身(ミ)ニハ、臨終(リンジュ)の善悪(ゼンマク)ヲバ、マフサズ。……愚痴無智(グチムチ)ノ人(ヒト)モ、オハリモメデタク候(サフラ)へ』

これは聖人八十六歳の消息文の一節であるが、死に臨む時の心構えといったものだろう。それよりも人生の一部始終はみ仏のさだめたもうものであると感じ、仏に一任する姿をあらわしておる。

よく人は他人の死に方を云々(うんぬん)する。苦しまずに死にたい、知らぬうちに死んでおれば一番よいのだなとか、三日ほど痛みはなく臨終を迎えたいものだとか、得手勝手なことが多い。聖人によると、一切おまかせの日々の連続が往生そのものであって、臨終の善悪は問題ではなかったはずだ。

他人の死、迫り来る自分の死、右往左往することこそ無信心のともがらである。その事を少しでも早く教えんとするのが真宗の聞法である。

小咄（こばなし）

お宮さんのすぐ東に天安貿易と称する倉庫がある。時々のぞいてみると、中国の雑貨を専門にしておる貿易業者だと。食材の空になったツボが時々並んでおる。中身を小分けにして販売しているらしい。

「そのツボ、わけてくれ」

と突然交渉に入ったが、相手は何くわぬ顔をして、

「好きなだけもっていけ」

いくら何でも同じツボを五個も十個も寄せ集める趣味はない。

「この一個でいいわ」

と言って、その日は帰った。後日同じように前を通る。大きめのツボが並んでおる。

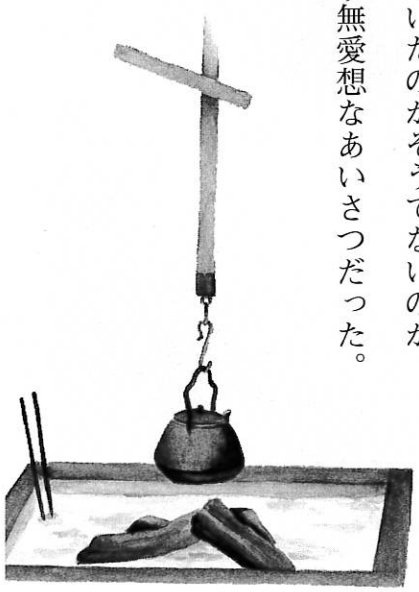
「おいおい、この一個はいくらだ？」

と申し出る。

「どうせ割ってしまうから差し上げますよ」と。

このツボは三個並んでいたが、三個もろともらってくるわけにはいかん。心を残しながら、一個を車に載せて帰る。

一個千円でも代金をとってくれたなら三個買ってくるのであったが、ただ差し上げると言われたなら欲を出すわけにはいかん。物の値段のタダというのは相手に安心感を与えるかもしれないが、そうでない方が求める者にとっては心地よい時もある。一カ月後、もらい物のまんじゅうを持ってお礼に出かけた。相手は私を意識していたのかそうでないのか、相変わらず無愛想なあいさつだった。



※行事予定

一月一日(木)10時　修正会

十日(土)19時　同朋委員会・例会

十九日(月)14時～16時　学習会

二十八日(水)10時　二十八日講・女人講

二月十四日(土)19時　同朋委員会・例会

十九日(木)14時～16時　学習会

二十八日(土)10時　二十八日講・女人講

ちいちの会